

一 次の文章を読み、問いに答えなさい。

## なお問いは、問題用紙

No. 3 にあります。

ナナが水色の車に乗って、久しぶりに帰宅した。紺色のセーターを着て、オレンジ色の縁のサングラスをかけ、リュックを背負っている。

寒かったの？

と訊いてみたら、ナナは、いいや、そうでもないよと答える。でも、セーター着てるよ、と訊くと、ああまあ、と、あいまいに答えて、荷物を下ろし、サングラスをはずし、ソファにふかぶかと座り込んだ。暑そうにも、寒そうにも見えない。カイクカイを感じていない、というより考えていない、しずかな表情である。

イチが帰ってきた。半袖だ。

寒くないの？ と訊くと、ぜんぜん、と言って、コップに

①  と牛乳をつぎ、 と飲んだ。イチは、つめた牛乳が大好きだ。

セーターの人と半袖の人の②間に立っているわたしは、長袖の上に半袖を

重ねて着ている。この格好、最初に誰かがはじめたときは、変な着方だ、と揶揄していたような気がするが、すっかり世間に浸透したので、自分も平気で、サイ用するようになった。気分次第で変えられる色や形の組み合わせが楽しいのである。といっても、タンスの引き出しを引いて、目についたものを取り出して着ては洗い、たんで引き出しの最前につめ、次にまたそれを取り出して、着ては洗い、またつめる、を繰り返しているのです。いつもだいたいの同じものばかりを着て過ごしている。この引き出しの奥に、誰かが謎の洋服をつめたこととしても、生涯気づかないかもしれない。

キャベツのようなワンピースをタンスの奥から見つけたお母さんが、自分の子どもにもちよつと着せてみたら、たちまちその子が洋服に支配された人格になってしまふ、という物語を昔書いたことがある。ワンピースは着たきりになり、女の子と一緒成長する。お風呂に入るときは、ワンピースごと洗うのだ。

この話を書いていたとき、人間が洋服を必要とすることについて考えていた。なぜ人間だけが生まれたままの姿では生きていくことができないのか。衣服を着用したから、体毛がなくなったのか、体毛がなくなったから、衣服を着用することになったのか。同時進行といったところか。

とにかく、衣服というものは、暑さ寒さをしのげれば、それでいいわけだ。目の前にあるタンスとクローゼットの中身が妙に気になりはじめた。「暑さ寒さをしのげればそれでいい」を基準に考えたら、九割方、「A」ではないか。タンスとクローゼットからすべての衣服を引きずり出し、九割【B】ことをシミュレーションしてみる。しかし、選択の基準が見つからないので、この件は、しばし保留にしたい。

ナナと散歩に出ることにした。少し肌寒い気がして上着を着たが、ナナはセーターのままである。セーターを着ているんだから、上着はいらないのだね、と思いつつ、アニメーション『アルプスの少女ハイジ』のことを思う。山のおじいさんの家に、ハイジがはじめて「デーテおばさんに連れてこられたとき、とても着ぶくれしていた。デーテおばさんが、今後必要なハイジの服を、本人に重ね着させていたのだ。ハイジは山に着いたとたん、その重そうな服をぱつ、ぱつと脱ぎすてながら走り出したような気がする。開放的で、とても気持ちがいいシーンだった。でも、この子はあるとき、引き返すことのできない人生を走りはじめたのだ。その後、幼いハイジの身に次々にふりかかる、<sup>1</sup>困難を反芻すると、胸が熱くなる。

人工都市に、人工的に植えられた植物が、さわさわと茂り、風になつてくる。プランターの小さな花々も、陽に向けて色とりどりの。花をを開き、可憐だ。③洋服を脱ぎ散らしながら走っていく子どもは、ここにはいない。

団地エリアの中の散策を続ける。④分け入っても、分け入っても、団地

団地の建物は、各年代ごとに少しずつデザインに変化が見られる。ブロックを整然と並べたような初期団地から、「とがり」のある形のものが見られる。

め、さらには、ふしぎな色使いがほどこされたものも出現する。しかしある時期から「とがり」が消えはじめ、色も洗味のあるものが好まれるようになり、結局のところ初期段階の長四角の基本へ「カイクカイ」しているように思う。というのは、あくまで「見」で、建築についての知識はほとんどなく、ほんとうのところはよく分からない。分からないが、<sup>5</sup>集合住宅の窓の「つ」ひとつが安らかならば、それでよいと思う。<sup>6</sup>建物に意味や価値をつけすぎない方がいい。肝心なのは、そこで誰かが命を灯し続けているという事実。暑さ寒さをしのぐためのもの、と思えば、建物も<sup>7</sup>と同じ。そんなことをとりとめもなく思いながら歩いていると、目の前に巨大な鉄塔が立ちふさがった。

(東直子『ゆずゆずり——仮の家の四人』中央公論新社)

二 一の文章を読み、問いに答えなさい。

なお問いは、問題用紙 No. 4 にあります。

雪の降りつづく日、真っ白な路上に立ちどまり、空を見あげて、次から次へ躍る **a** 降ってくるたくさんの雪片を見てみると、いつかいつさいの物音が消えてしまい、ちいさな雪片の一つ一つが、まるでたくさんの自由な小人のように見えてきます。雪はいつも楽しそうに笑いながら降ってくるようでした。そうして、その笑い声に耳澄ましているうちに、自分がここにいる、ここにはいない **b** 不思議な思いを、いつも覚えていました。降りつづく雪をみあげているというただそれだけのことに、そうしていると、自分たちがった世界の真ん中にいる **c** たのです。

雪合戦や雪だるまから極滑りまで、雪で遊んだ幼いころの楽しい思い出にもまして、生まれそだった東北の火山の麓の冬の、雪の降りつづく日々がくれたものとも忘れがたい甘美な記憶は、何といっても、その静かだった時間の記憶です。降りつづく雪が、日常の時間を消し去ると、街には、ただ静かな時間だけがのこされる。その静かな時間には何ともいえない清浄な魅力があつて、凍るような風も寒さも **①** ものかは、少年のわたしは、雪が降りだすと親しい友人と、街のあちこちを歩きまわりました。どこへゆくというのでもなく、ただただ話しつづけ、ときに黙りこみ、寒さでがちがちになるまで、とにかく歩きまわった。

**②** 思いだしてそうだったんだとしか言えないけれども、そのころわたしたち、つまり親しい友人とわたしとは、ほとんど毎日会って、話をしていた。学校から帰ると、すぐにとびだして、どちらかがどちらかの家へかけていつて、誘います。そうして、それから街を歩きまわって、日が暮れるまで話しつづける。夏であれば、たいいどどちらかの門のまえに何時間も立ったまま話しつづけて平気でしたが、寒さのきびしい冬はさすがにそうはゆかず、街を歩きまわって、身体を暖めながら、話しつづけた。

よくあんなに話しつづけるということができたものと思いますが、そのときそんなにも毎日毎日何を話しつづけていたかは、何一つ覚えていません。ただそうやって毎日毎日、友人と会って、**a** **やみくも**に話しつづけていたということが、今は懐かしい時間として記憶のなかにのこっているだけです。火山の麓の街の時間には、そうした少年たちのあてどない無量の時間を容れられるだけの、ゆつたりとした日々があつた。

昭和二十年代後半、一九五〇年代前半。わたしたちの街には、まだ人力車屋があり、蔵のある呉服屋があり、おおきな暖簾をきりりと店先に張った酒屋があり、本屋のほとんどは土間で、少年のわたしはまたコーヒーをあいだに話をする習慣をもたず、コココーラもハンバーガーもまだ知りませんでした。 **③** 暗闇のなかの宝島にほかならなかつた映画館をのぞけば、わたしや友人にとっては、話をしながら街をぶらぶら歩きつづけることが、何にも代えがたい楽しみだったので、何もなかつたといえはそのとおりですが、ただわたしたちは、誰のものでもない自分の自由な時間を、ありあまるほど **B** ふんだんにもっていました。時代は乏しかった。しかし、わたしたちの持ち時間はゆたかでした。

火山の麓の街の冬はおそろしく永かつたけれども、わたしたちは退屈というものを知らない少年でした。一度何がきっかけだったのか、友人と突然口論になって、雪のなかで取っ組みあいになった。さんざん息を切らして、もう絶交だと罵りながらその日は別れますが、次の日には二人でまた、雪の街でながい時間を共にして、降りつづく雪のなかに流れる川を見にいった。

雪にすっかり隠れていた河畔の道、古い鉄橋。雪を繁みのように枝にこぼれに載せていた、校庭のおおきな一本の樺の木。がらんとした寺の境内の端に立っていた、鐘のない鐘楼。除雪網を車体のまえにつけて、暗い街角を傾ぐように曲がってゆくチンチン電車。街の向こうへ渡る長い陸橋。

火山の麓の、雪の季節の静かな街の時間というのは、楽しそうに笑いなが

ら降ってくる雪の小人たちのくれた魔法のような時間だったのかもかもしれません。すべてがまったくの無償だった時間。いまでは、しかし、その火山の麓の風の街にもかつての冬の街の景色は失われて、冬に雪が降り積もることさえ、めつたになくなりまして。かつて毎日を共にした二人の少年はそれぞれに火山の麓の街を去って、別々の街で別々の日々をかさねるようになってからは、二度会っただけです。しかし、何を話すべきか。そのときはもう、魔法の時間を失くしてしまつた一人は、おたがいに知りませんでした。

そうしてわたしは、東北の火山の麓の街を少年のとき離れてから、すぐに家も東京に引越して、季節のめぐりに帰郷するということがないままに、それきりになってしまい、ふたたびその街を訪れたのは、思いがけなくそれから二十五年もの長い空白をへてのちでした。しかし、その長い空白は、かえってわたしのなかに、隅々までよくよく知りぬいた親しい「わたしの街」の記憶をあざやかにしたように思います。

二十五年ぶりの街の景色は、もちろん記憶のなかの「わたしの街」の景色とは、すべてちがっていました。街並みは変わり、道は広くなつて、新しい街角に新しい建物がつぎ、市電が消え、街の店々は屋号こそおおくおなじでもたすまいをすっかり変えており、予期していたものの、街の真ん中に生まれて、根つから街の子としてそだったわたしの記憶にあつた **④** 「わたしの街」の確かな目印は、**C** あらたかなくて、友人はもちろん見知つた顔さえない街には、「わたしの街」はすでに見つけようもありませんでした。

そこにあつたものが、もうそこになかつた。目抜き通りにあつた **A** 新聞社がそこになく、よくよく親しんだ映画館がそこになく、風邪のたびに通つた街の病院がそこになく、在籍した **I** 小学校はそこになく、中学校はそのときは **U** 病院になつていて、暗い木立ちに囲まれていた **工** 裁判所は明るい公園に、街はずれにあつた高い塀の刑務所は **オ** TV局の開かれた建物に、というふうな、街にはただ、**⑤** まぶしい「現在」のほかほなかつた。訪れたのは冬がくるすぐまえの季節でしたが、遠く広い樺野をもつ火山と、街をゆつたりとめぐる丘陵と、そして街を横切つて流れる川がなかつたら、そこが自分の街だと思えなかつたくらいです。

二十五年の空白は確かに永すぎましたが、その真新しい現在のなかで、ただ一つのこざれていた「わたしの街」の景色は、一本のおおきな木です。卒業した高校の校庭のわきに、おおきな枝を空にのびにひろげていた一本の樺の木。母校は校門も校舎もすっかり変わっていましたが、すでに冬を予感させる灰色の空にばいに見事に枝を張つた樺の木はそのままでした。その一本の木の下に、二十五年ぶりの街のどこにも見つけられなかつた、懐かしい記憶があつた。火山の麓の街が少年のわたしにくれた、あてどない無垢の時間の記憶です。

**⑥** 誰もが何者でもなく、それゆえ何者でもありえた冬の少年の日々の思いが、ふいに間近に思ひだされた。そうして、ふつとすべてが静まりかえつてくるような甘美な時間の感触を感じ、その木の下に立つて空の枝々を見あげているうちに、それまでずっとちがうちがうという思いに囚われていた自分を忘れて、いつかいまはない「わたしの街」のなかに入りこんだような深い感覚を、わたしは覚えていました。

現在のなかにあつて、記憶は見えないものでしかありません。しかし、一人のわたしをいま、ここにつくっている生きられた経験が記憶であり、わたしたちはほんとうは、いま、ここに記憶と現在の二つの時間を、同時に生きている。

**⑦** 生まれてそだった街の一本のおおきな樺の木は、見えない「わたしの街」への秘密の入口でした。冬近い火山の麓の「わたしの街」の一本の樺の木の下のこざれていた、とうに失われてしまつたと思つていた **魔法の時間**。

**⑧** どんな記憶の目印もたやすく無くしてしまつたような現在にあつて、一本のおおきな木は、一人のわたしを、いま、ここに活かしている見えない記憶を、ゆたかな沈黙のように抱いている。「深呼吸の必要」という詩集に「おおきな木」という詩を書いたとき、その詩に刻んだのは、一本のおおきな木のもつその秘密です。



一一

問一 a c に、「ア」をふさわしい形に変えて入れなさい。

問二 線部①「ものは古い言い回しです。この言いかえとして最もふさわしいものを次のア〜エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア もの足りず
- イ ものも知らず
- ウ ものいづもつかず
- エ ものともせず

問三 線部②「思いだしてそうだったんだとしか言えない」とありますが、「そうだったんだ」に筆者の感動が表されていると考えたとき、その感動を表現した部分を本文中から二五字以内で探し、最初の五字を答えなさい。

問四 線部A〜Cの語をわかりやすく言いかえて答えなさい。

問五 線部③「暗闇の中の宝島にほかならなかった映画館」とありますが、当時の筆者にとって映画館はどのような場所だったのか、答えなさい。

問六 線部④「わたしの街」の確かな目印「にあたるものは何か、本文中に□で示されている次のア〜オの語からすべて選び、記号で答えなさい。

- ア 新聞社
- イ 小学校
- ウ 病院
- エ 裁判所
- オ TV局

問七 線部⑤「まぶしい」「現在」という表現にめられた筆者の思いとして最もふさわしいものを次のア〜エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分が知っている故郷とはまったくちがう、新しく美しい街にあこがれをいだいている。
- イ 新しい街には、古い時代しか知らない自分なじめない、と取り残されたように感じている。
- ウ 暗くてさびしい田舎だった故郷がここまで経済的に発展したのだとほろろしく思っている。
- エ 見たこともないほどの都会になっていた故郷にふさわしくない自分を恥ずかしく感じている。

問八 線部⑥「誰もが何者でもなく、それゆえ何者でもありえた」とはどついつい何を言っているのか、説明しなさい。

問九 線部⑦「生まれてそだった街の一本のおおきな樺の木は、見えないうわたしの街」への秘密の入口でした」とありますが、どういふことを言っているのか、そのように言う理由を明らかにしながら説明しなさい。

問十 線部⑧「どんな記憶の目印もたやすく無くしてしまうような現在とありますが、筆者は「現在」をどのような時代と考えているのか、答えなさい。

問十一 魔法の時間とありますが、あなたが経験した「魔法の時間」について述べなさい。

三 線部(1)〜(10)の語のうち、読みが正しいものは○を書きなさい。読みが誤っているものは、正しい読みを答えなさい。

- (1) はとば 波止場 近くの (2) さっぶうけい 殺風景 な商店街に、親類が
- (3) いとな 営む (4) やおや 八百屋がある。そこでみかんを一箱買って家に帰り、箱をかかえたまま居間の (5) 障子 を足で開けると、
- (6) あんじょう 案の定 (7) よこちやく 横着 するな! と (8) いかめ 険しい顔をした祖父にしかられた。今日は、ことこの (9) そと 外きげんが悪い。ここは (10) へた 下手に出たほうが良さそうだ。箱からみかんを取り出して一つわたすと、ようやくにこりと笑ってくれた。